

# 通 信



日 仏 東 洋 学 会

1995年12月

東 京 ・ 京 都

第20号

## 日仏東洋学会

会 長：福井 文雅  
名誉会長：ANSART, Olivier · 山本 達郎 · WASSERMAN, Michel  
顧問：秋山 光和 · 江上 波夫 · 藤枝 晃 · 市古 貞次  
彌水 昌吉  
評議員：(竺沙) 雅章 · DURT, Hubert · 福井 文雅 · 濱田 正美  
羽田 正 · (池田) 温 · (石沢) 良昭 · (石井) 米雄  
彌水 信美 · (狩野) 直禎 · (加藤) 純章 · 興膳 宏  
(桑山) 正進 · 京戸 慈光 · 前田 繁樹 · 松原 秀一  
御牧 克己 · 森安 孝夫 · 明神 洋 · 中谷 英明  
大谷 暢順 · 齋藤 希史 · 坂出 祥伸 · 高田 時雄  
田中 文雄 · 坪井 善明 · 八木 徹 · 山田 利明  
代表幹事：興膳 宏  
幹 事：濱田 正美 · 石沢 良昭 · 前田 繁樹 · 御牧 克己  
明神 洋 · 中谷 英明 · 齋藤 希史 · 高田 時雄  
八木 徹  
監 事：加藤 純章 · 岡本 さえ  
会計幹事：羽田 正  
推薦委員会：福井 文雅 · 池田 温 · 加藤 純章 · 興膳 宏  
御牧 克己 · 山本 達郎

服部

### 本 部

〒162 東京都新宿区戸山1-24-1  
早稲田大学文学部 福井文雅研究室

### 事 務 局

〒606 京都市左京区吉田本町  
京都大学文学部 興膳 宏研究室  
TEL: 075 753 2808

### 編集担当

〒112 東京都文京区白山5-28-20  
東洋大学文学部中国哲学文学科  
山田利明研究室

入会申し込み・会費納入(年会費3,000円)

〒113 東京都文京区本郷7-3-1  
東京大学東洋文化研究所  
羽田 正

表紙 題字 元の趙孟頫の六体千字文から  
高田時雄氏集字  
カット イラン陶器模様(13世紀)から  
桑山正進氏描画

## 日仏東洋学会会則

- 第1条 本会を日仏東洋学会と称する。
- 第2条 本会の目的は東洋学に携わる日仏両国の研究者の間に、交流と親睦を図るものとする。
- 第3条 本会の目的を実現するため次のような方法をとる。  
(1) 講演会の開催  
(2) 日仏学者の共同の研究及びその結果の発表  
(3) 両国間の学者の交流の促進  
(4) 仏人学者の来日の機会などに親睦のための集会を開催する  
(5) 日仏協力計画遂行のために学術研究グループを組織する
- 第4条 本会の本部は日仏会館におき、事務局は代表幹事の所属する機関内におく。
- 第5条 本会会員は本会の目的に賛同し、別に定める会費をおさめるものとする。会員は正会員および賛助会員とする。
- 第6条 正会員および賛助会員の会費額は総会で決定される。
- 第7条 本会は評議員会によって運営され、評議員は会員総会により選出される。評議員の任期は2年とするが、再任を妨げない。
- 第8条 評議員会はそのうちから次の役員を選ぶ。これらの役員の任期は2年とするが、再任を妨げない。  
会長 1名 代表幹事 1名 幹事 若干名 会計幹事 1名  
監事 2名  
日仏会館フランス学長は、本会の名誉会長に推薦される。会員総会はその他にも若干名の名誉会長・顧問を推薦することができる。
- 第9条 会長は会を代表し、総会の議長となる。代表幹事は幹事と共に会長を補佐して会の事務を司る。会計幹事は会の財政を運営する。監事は会の会計を監査する。
- 第10条 年に一回総会を開く。総会では評議員会の報告を聞き、会の重要問題を審議する。会員は委任状又は通信によって決議に参加することができる。
- 第11条 本会の会計年度は3月1日より2月末日までとする。
- 第12条 この会則は総会の決議により変更することができる。
- 第13条 以上の1条から12条までの規定は、1989年4月1日から発効するものとする。

## STATUT DE LA SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DES ETUDES ORIENTALES

- Art.1 Il est formé une association qui prend le nom de Société franco-japonaise des Etudes Orientales.
- Art.2 L'objet de la Société est de promouvoir les échanges scientifiques et amicaux entre spécialistes français et japonais des Etudes Orientales.
- Art.3 Les moyens employés pour réaliser l'objet de la Société sont entre autres les suivants:  
1 - Organisation de conférences,  
2 - Etudes et recherches entreprises en commun par des scientifiques français et japonais et publication de leurs résultats,  
3 - Développement des échanges de scientifiques entre les deux pays,  
4 - Organisation de réunions amicales entre scientifiques français et japonais, notamment à l'occasion des visites des scientifiques français au Japon,  
5 - Organisation de groupes de travail spécialisés, pour la poursuite de projets coopératifs franco-japonais.
- Art.4 Le siège de la Société est établi dans la Maison franco-japonaise et le bureau à l'établissement auquel appartient le secrétaire général.
- Art.5 Sont membres de la Société toutes personnes qui approuvent le but de la Société et acquittent la cotisation. La Société comprend des membres ordinaires et des donateurs.
- Art.6 La cotisation pour des membres ordinaires et des membres donateurs est décidée par l'Assemblée Générale.
- Art.7 La Société est administrée par le Conseil d'Administration. Les membres du Conseil d'Administration sont élus par l'Assemblée Générale des membres. Ils sont élus pour deux ans et sont rééligibles.
- Art.8 Le Conseil d'Administration élit dans son sein:  
- 1 Président - 1 Secrétaire Général  
- Plusieurs secrétaires - 1 Trésorier - 2 Auditours.  
Les administrateurs ci-dessus sont élus pour deux ans et sont rééligibles. Le Directeur français à la Maison franco-japonaise est statutairement président d'honneur. En outre, l'Assemblée Générale peut élire un ou plusieurs présidents d'honneur et plusieurs conseillers d'honneur.
- Art.9 Le président représente la Société et préside l'Assemblée Générale. Le secrétaire général assiste le Président pour assurer avec les secrétaires les activités de la Société. Le trésorier gère les finances de la Société. Les auditeurs surveillent la comptabilité.
- Art.10 L'Assemblée Générale se réunit une fois par an pour entendre le compte-rendu du Conseil d'Administration et délibérer sur les problèmes importants. Les membres de la Société peuvent voter par procuration ou par correspondance.
- Art.11 L'année fiscale de la Société commence le premier mars et prend fin le dernier jour du mois de février.
- Art.12 Les statuts peuvent être modifiés par décision de l'Assemblée Générale.
- Art.13 Les dispositions statutaires prévues dans les articles 1 à 12 ci-dessus entreront en vigueur le premier avril 1989.

目 次

---

敬弔 宮崎市定先生	福井文雅	----- 1
ヴァチカン図書館の中国関連蒐集について	高田時雄	----- 3
文献紹介		
ジャクリーヌ・ピジョー著『道行文』	鹿島有希子	--- 6
新刊紹介	菊池章太・田中文雄	----- 9
報 告		-----13
学術会議だより		-----15
編集後記		-----17
1995年度会員名簿		-----18

---

## 敬弔 宮崎市定先生

福井文雅

榎一雄先生が急逝されて「次の日仏東洋学会会長はどうしたら良いか？」が、当時主幹であった私にとっては最も急を要する問題になった。各方面の先輩の方々に御意見を徴するのが私の役目であったが、その時出て来た候補者名の中に宮崎市定先生があった。

宮崎市定先生と言えば、フランスに留学し Prix Stanislas Julien (スタニスラス・ジュリアン賞) も受けておられる方であり、東洋史学界の大御所、会員中の最長老でもあられたから、私には至極もっともな提案と思われた。

ところが、関西の方面からは「それだけは無理だ。お願いでもすれば、却って貴方が怒られますよ」と言う声が聞こえて来る。怒られたのでは叶わないので、一体それはどう言うわけだ？ といろいろ訊ねて見ると、先生はそう言う役職はお嫌いとのこと。「お嫌いでも何でも、公けの立場からは是非ともこの際成って戴かねば」と私は考えたのであるが、結局は沙汰止みに終わった。

先生が亡くなられて、改めて『宮崎市定全集』全25巻を繙いて見ると、先生が一貫して学界の所謂政治面にはタッチされなかった様子が判る。多分どなたがお願いしても、本会の会長職はお受けにはならなかったことであろう。危うく私も怒られるところであった。

とは言え、先生は単なる政治嫌いの学者であったわけではない。それどころか、先生は鋭い政治的感覚にむしろ恵まれたお方ではなかったか、と私には思われるのである。もちろんこの場合「鋭い政治的感覚」と言ったのは良い意味であって、言い換えれば、広く全体を見渡して、バランス良く的確に、箇所箇

所の対応価値を判断出来る能力を指す。先生の論著を読むと、その能力を十分備えておられたことが良く判る。

先生の論著の特徴は、上記の、良い意味での政治的感覚に立つ「透徹した見通し」と、それを表現する「明晰さ」にある、が私の感想である。膨大な資料でも、いったんは咀嚼し自家築籠中のものとされてから、改めて先生の見識、方法から批判し分析し、御自分の目を通し、御自分の言葉で結論を吐き出しておられる。その結果、どんな難しい内容についても論述は平易明晰であった。

この明晰さは、資料全体を過不足無く的確に解釈できる能力と表裏を成すものである。自説に都合の良い資料ばかり並べ立て、読解できない漢文史料などには頬かむりして引用しない論文が、世にはまゝ有るものであるが、宮崎先生はそれとは凡そ正反対で、御自分で納得の行かない、判らないことは、率直に「納得が行かない、判らない」とお書きになっている。

全集本『九品官人法の研究』の「補注」(44)の「郡中正を罷するの記事」に、「〔この〕罷郡中正、とある記載は何としても理解できない。」とし、代案を示しておられるのがその一例である。よほどの学力、自信が無ければ出来ないことであった。

『九品官人法の研究』は、先生の代表作として誰しものが認める著作である。もっとも、先生御自身はその世間の定評にいささか御不満の念を洩らしておられたが —それも当然で、他にも代表作と呼ぶべき論著は多い—、しかし、これが名著であることには違いない。特に、九品官人法を説明するのにピラミッド型図形を創作されたのには、驚嘆したものである。あの複雑な九品官人法も、図形のお蔭で明々白々となっている。この拙文を綴るに

当たって、改めて先生の『全集』本の「自跋」を拝見したが、この図形には先生御自身も秘かに自信をお持ちだったようである。

大学の卒業論文として「清談」について書くことになって、私はこの名著を読み、「清談」と言う先生お書きの関連論文も読んだ。先生の明晰な判断、叙述は、それまでの先行論文、類書とは格段の差があった。

先生の「明晰さ」は、言うまでもなくデカルトが強調した学問の方法。宮崎先生がフランスに惹かれて留学された原因には、フランスの学問が重視するこの「明晰さ」も入っていたのではなからうか。私はフランスへ留学する為に神戸から船に乗る直前に先生にお会いしている（先生はその時、フランスで担当なさった授業の表を見せて下さった）。帰国後にも勿論お会いしているのであるが、先生の「明晰さ」が何処に由来するのか、遂に話題にし損なってしまったのは、残念極まりないことである。

先生の御研究では、資料をそのまま鵜呑みにはしておられない。眼光紙背に徹して史料の裏にまで及び、一捻りも二捻りもした解釈を示して、記述の上っ面に左右された解釈を斥ける。この読みの深さは先生の独壇場であったように私には思われる。

先生のこの「読みの深さ」を評して、「斜に構えた（素直でない）解釈」とか何とか言う人がいる。先生の『論語の新研究』についても同様の評を聞く。しかし、先生の説に資料をもって具体的に反論した評を私は未だ見ないのである。多分これまでの評は、先生の読みの深さにまで未だ達していないのであろう。

先生の学問は行くとして可ならざるは無く、古今を貫き東西に涉っておられたが、御自分の「持論」としては「歴史は須（すべか）ら

く現代を起点として考察すべきもの」としておられた（中公文庫『中国政治論集』1990年1月刊、文庫版追記）。その通りであって、結局のところ現代に連続しないような研究は、学問的にはどう言う意味があるのであろうか。

「現代を起点として考察すべきもの」なのであるから、当然現代の事象にも先生の眼光は届き、同書の「自跋」には次のように言われる —

正直に言って毛沢東思想は、決して興味あるものではない。「語録」を通読するだけでも、相当の忍耐を要するのが正直な読後感である。

文化大革命の盛んな頃、私はまだ大学院の学生であったが、僭越ながら実は先生と同じ感想を「毛沢東語録」について抱いたものであった。「語録」は時代的隔たりがある文を雑然と並べた書であるから、論理的には整合性を欠く文が多いのである。しかし、毛沢東と言えば神聖視し、私のように批判的感想を洩らす人物を白眼視するような風潮が当時の日本の一部にはあり、学生の私は閉口した思い出がある。

従って、先生の「自跋」に接して転た感慨に耐えなかった。京都大学教授としての立場にあった先生であれば、さぞかし当時は私などよりももっと閉口する目に遭われたことであろう。

このように先生の思い出を書いて行くと、次から次へと出てきてキリがない。あとは、会員各位が先生の『全集』を — 少なくとも各巻の「自跋」は — 読まれんことを願ひ、皆様と共に先生の御冥福を祈るものである。

## ヴァチカン図書館の 中國關連蒐集について

高田時雄

### その來源

今日ヴァチカン図書館に所蔵される中國書あるいは中國に関する文書類は、なんらかの組織的な規準に基づいて集められたものでは決してなく、すべてがその時々々の氣紛れな寄贈に基づくものであった、といっても過言ではない。またある時時点で必要な書物を補充するというようなことも全くなかったために、その内容は極めて雑多であるとともに、かつかなり偏ったものである。したがってこの蒐集は大學の中國學科のそれとは全く性格を異にしており、それを中國學の參考圖書館として利用するようなことは到底考えられない。しかしながら、ヴァチカンがカトリックの大本山であり、初期のヨーロッパ中國學がもっぱらイエズス會士を初めとするカトリック宣教師の手に委ねられていたという歴史的事情から、この図書館には耶穌會版をはじめとして、布教關連の稀觀書が多く、また宣教師が中國に関する知識を得るために中國で蒐集した書物の中に意外な稀觀書があったりする。また宣教師自身が漢文やラテン文、フランス文で書き残した著述の稿本類も少なからず残されている。その意味で多分にわれわれの注意を引くものであることは贅言を要しない。

ところでヴァチカン図書館には相當早くから中國書が齎されていたらしい。ゴンサーレス・メンドーサが著した『シナ大王國志』には當時のヨーロッパにおける中國書の收藏について次ぎのように書いている。

「(中國の書物は) 今日、ローマの聖殿の圖書館や(フェリペ二世)陛下が王家サン・ロレンソ修道院に設立された圖書館、またその他の場所でも見ることが出来る」<sup>(1)</sup>

『シナ大王國志』は一五八五年ローマで初版を出したが、そのほぼ同じ頃にヴァチカンで中國書を見た人物がもう一人いる。「エッセー」で名高いかのモンテーニュがその人で、彼は一五八一年三月六日、ヴァチカン圖書館を訪問、セネカやプルタークなどとともに、そこで一冊の中國書を見たと書き残している。

「そこで(ヴァチカンで)一冊の中國書を見た。妙ちきりんな感じ。我々の紙よりもずっと柔らかく透き通った素材の用紙。インクの滲みに堪えきれないので、用紙の一面にしか文字が書かれず、その用紙はすべて外側の端から二重に折りこんで、しっかり保つようにしてある。」<sup>(2)</sup>

これらの中國書は宣教師の手によりイベリア半島經由で齎されたものに違いない。東方航路を支配していたスペイン・ポルトガルには早くから中國の品物が舶載されていた。メンドーサがヴァチカンとともに挙げるサン・ロレンソ修道院の圖書館、すなわちマドリー近郊のエル・エスコリアル(El Escorial)には、もとイエズス會士であったポルトガル人、グレゴリオ・ゴンサルベス(Gregorio González)によって齎された中國書が今も所蔵されている<sup>(3)</sup>。イエズス會最初の中國宣教師の一人ミケーレ・ルッジェーリ(Michele Ruggieri, 1543-1607)は一五九〇年にローマに歸着し、中國書を持ち歸っている。それがヴァチカンに歸した可能性がある。しかし詳しいことは分かっていない<sup>(4)</sup>。またメンドーサやモンテーニュの記録によって十六世紀の末に確實に存在した中國書も、現在のヴァチカン圖書館中になお存在す

るのかどうか、また存在するとしても現蔵書のどれがこういった初期蒐集に属するものかということも明かではない。以下、現在所蔵されるものにつき、比較的來歴の明らかなるものを順次見ていくこととしよう。

現在のヴァチカンの中國蒐集のうちで、收藏の経緯がはっきりとわかる最も古いものはパラティン・コレクション (Fondo Palatino) 中のものである。これはドイツの三十年戦争においてババリアのマクシミリアンがハイデルベルクを占據したことにより、パラティン (ファルツ) 選挙侯フレデリック五世の蔵書を教皇グレゴリオ十五世に譲渡することとなったものである。実際にこのコレクションがヴァチカンに到着したのは次ぎの教皇ウルバヌス八世治世下の一六二三年であった。このパラティン・コレクション中には中國書のみならず、東洋語で書かれた寫本が多く、このコレクションの到着によってヴァチカンの東洋蒐集は急に豊かになったといわれる<sup>(5)</sup>。現在このパラティン・コレクション中には、水滸傳の明末刊本二種 (ともに不全) を含めて七點の中國書が存在する<sup>(6)</sup>。

次いでヴァチカンに入ったのは、イエズス會が中國各地で出版した教理と科學に関する一連の書物である。これら耶蘇會版は一六八二年にフランスのイエズス會士クプレ (Philippe Couplet, 1622-1692) が一時ヨーロッパに歸った際に齎したものである。その時一緒に持ち歸ったものと推測される出版目録「天主聖教目録」「曆法格物窮理書目」も今日ヴァチカンに保存され、對應するラテン語の目録もある<sup>(7)</sup>。目録中の書物のすべてが保存されている譯ではないが、耶蘇會版の尤品がよく揃っている。とくに「西字奇蹟」は他に所蔵されていることを聞かない<sup>(8)</sup>。このクプレ將來書は現在、東洋一般蒐集 (Raccolta Generale Oriente) の第三

部の202から246を占めている。

同じく東洋一般蒐集の第三部、247から268まではフランシスコ會のカロルス・オラツィイ・カストラノー神父 (Carolus Orazi de Castorano, 1673-1755) の残した資料である。カストラノーは一七〇〇年に中國に着き、山東と北京で布教活動に従事したが、典禮問題による紛糾のすえ1734年にイタリアに戻った。彼の残した資料はその死後、最終的にヴァチカンに歸した。その多くが布教関係の書物であるのは當然であるが、ほかにも四書五經や千字文を初めとする童蒙書、文公家禮、天下路程などの書名が見える。彼の残した寫本類は別に極東コレクション (Vaticano Estr. Oriente) に収められている。その中にはカストラノー自筆の辭書や文法、また受洗者名簿などが含まれる。

フランスのイエズス會士ジャン＝フランソワ・フーケット (Jean-François Fouquet, 1665-1741) は大量の中國書をパリの王立圖書館の爲に購入したことで有名であるが<sup>(9)</sup>、彼自身の中國に関してラテン語で認めた寫本がその死の直後に一七四一年三月十五日付けでヴァチカンに遺贈された<sup>(10)</sup>。フーケットの他の寫本 (フランス語で書かれたものなど) は下に述べるボルジア・コレクション中にも存在する。

ずっと時代が下って一九〇二年に布教聖省 (Congregatio de Propaganda Fide) から移管された大量の圖書のうちに、バルベリーニ・コレクション (Fondo Barberini Orientale) とボルジア・コレクション (Fondo Borgia Cinese) とが含まれていた。前者は寫本・刊本あわせても三十點足らずに過ぎないが、その中では原帙を保存する『天學初函』や萬曆刊の『不求人』『萬寶全書』『文林廣記』などの民間類書が注意される。後者のボルジア・コレクションは點數にして五三六點で、質量ともにヴァチカン最大のコレクションである。



布教聖省はグレゴリオ十五世によって一六二二年一月六日に設立されたものであるが、海外布教を管轄する任務を帯びていたため、ここに大量の中國關係書が蓄積されることになった。上にフーケットの寫本がボルジア・コレクション中にもあることを指摘したが、今日ボルジア・コレクションに屬する中國書の中にはフーケットによって中國から持ち歸られたものの含まれている可能性がある。フーケットがその持ち歸った中國書のすべてをフランス王立圖書館に納めたとは考えにくい。

ボルジア・コレクション中でもう一つ注意されるのはイタリアのシエナに生まれた中國學者アントニオ・モントウッチ (Antonio Montucci, 1762-1929) の舊藏書である。モントウッチは中國語辭書の出版にその生涯を費やした人物で、最初ロンドンで活動し、後プロシャ王フリードリッヒ・ヴィルヘルムの後援でベルリンに移り、孜孜として中國語辭書の編纂に従事していたが、ナポレオン戦争のために挫折、晩年夢破れてイタリアに歸り、すべての藏書と稿本、そして中國語辭書のために作製した活字二萬九千を教皇レオ十二世に譲渡した。これらは一八二九年、布教聖省に入り、後一九〇二年に及んでまたヴァチカン圖書館に歸したわけである。モントウッチの藏書は、その目的とした所が中國語辭書編纂にあったためであろう、『字彙』『正字通』『正字通』を初めとする各種の中國辭書、さらに宣教師の編纂した對譯辭書などが非常に丹念に集められている。モントウッチはこれらの書物を非常に苦勞して、時には相當な金額を支拂って蒐集した。本の扉の内側に取引の際の手紙や領收書が貼付されてあって、入手のいきさつの分かるものが間々ある。モントウッチは可成りの書物をクラブロート (Julius Klaproth, 1783-1835) から買っている。

その他、中國書を含む小さな蒐集が幾つか存在する。極東蒐集 (Fondo Vaticano Estremo Oriente) は寫本部に屬し、大部分がヨーロッパ語で書かれた資料であるが、宣教師による中國語辭書、文法が豊富である。また折りに觸れて寄贈される中國書は東洋一般蒐集に屬することになり、現在第六部にまで及んでいる。

大戦後の新しい増加で特記すべきものは、ローマ大學教授であったヴァッカ (Giovanni Vacca, 1872-1953) の藏書がその死後に齎されたことである。もともと數學から出發したというこの人物の藏書には、算學書をはじめとする理科の書が多いのが特長である。また地方志が割合目に着くのは、ヴァッカはローマ大學で東アジアの歴史と地理とを擔當していたというから、その必要上この種のものを集めたのであろう。他には道教や回教の書物も見えるが、他方面に渡るその蒐集は總計三、四〇〇種類と言われる<sup>11)</sup>。

(次號に續く)

## 注

(1) «se puede ver oy en Roma en la Bibliotheca del sacro Palacio, y en la que su Magestad a hecho en el Monasterio de san Lorenzo el real, y en otras partes....» (Juan González de Mendoza, *Historia de las cosas mas notables, ritos y costumbres....* Roma, 1585. Libro Tercero, Cap.XIII, p.105)

(2) «J'y vit ..... un livre de China (sic) , le caractere sauvage, les feuilles de certene matiere beaucoup plus tendre et pellucide que notre papier ; et parce que elle ne peut souffrir la teinture de l'ancre, il n'est escrit que d'un coté de la feuille, et les feuilles sont toutes doubles et pliées par le bout de dehors où elles se tiennent.» (Montaigne, *Journal de Voyage en Italie*, Ed. Garnier, 1955, Paris, p.114)

(3) Gregorio de Andrés, O.S.A., Los Libros chinos de la Real Biblioteca de el Escorial, *Missionalia Hispanica*, XXIV, No. 76, 1969, pp.115-123. また、この論文に依據した榎一雄「漢字の西方傳播」、もと『月刊シルクロード』第四卷第六~八、十號 (一九七八年

七～十二月)、いま『著作集』第四卷(一九九三、汲古書院)に収録。その二二〇～二二四頁を参照されたい。Gregorio de Andrés氏の論文のコピーは関西大学の井上泰山氏の御好意で入手し得た。記して感謝する。

(4) Donald Lach, *Asia in the Making of Europe*, Vol. II, Chicago 1977. pp.53, 528.

(5) Jeanne Bignami Odier, *La Bibliothèque Vaticane de Sixte IV à Pie XI*, Vatican 1973, pp. 107, 112.

(6) ベリオが1922年にヴァチカンの中國書の草目を作ったときには、これらの書物はなお初期蒐集(Prima Raccolta)中に含まれていた。

(7) Vat. lat. 13201. f. 281-294' *Catalogus librorum Sinicorum quos annuente SS<sup>mo</sup> D. N. Innocentio XI. Philippus Couplet Soc: Iesu Procurator Missionis Sinicae Bibliothecae Vaticanae dono dedit Anno Dm. MDCLXXXV. Giorgio Levi Della Vida, Ricerche sulla Formazione del più antico Fondo dei Manoscritti Orientali della Biblioteca Vaticana*, Vatican 1939, p. 8を参照。これによればクレがヴァチカンに中國書を寄贈したのは一六八五年のことであるのが分かる。最初にこのラテン語目録の存在に注意を向けてくれた友人 Francesco Du Arelli に感謝する。

(8) これは『程氏墨苑』に収録されたものの原刻本である。王重民「羅馬訪書記」、『圖書季刊』3-4(1936)、後『冷廬文叢』(1992上海古籍出版社)に収録。その頁801を参照。

(9) Cf. John W. Witek, Jean-François Fouquet et les livres chinois de la Bibliothèque Royale, *Les Rapports entre la Chine et l'Europe au temps des Lumières (Actes du IIe Colloque international de sinologie)*, Paris 1980, pp.145-171.

(10) これは現在 Lat. lat. 12851-12867として所蔵される。Cf. Odier, op.cit., p. 176, note 92.

(11) Cf. Yves Hervouet, Les Bibliothèques chinoises d'Europe occidentale, *Mélanges publiés par L'Institut des Hautes Etudes chinoises*, Tome Premier, Paris 1957. p. 498.



## 文献紹介

Jacqueline PIGEOT

“MICHIIYUKI-BUN”

ジャクリーヌ・ピジョー著 『道行文』

鹿島有希子

本書の著者であるジャクリーヌ・ピジョー女史は、周知のようにパリ第7大学の教授で、フランスにおける日本古典文学研究の第一人者である。御伽草子の研究で多くの論文を発表し、フランス国立図書館東洋写本部所蔵の奈良絵本の翻刻を、日本の「古典文庫」からも出版しており、日本の研究者の間では、御伽草子をはじめとする中世文学の研究者として知られる。

本書は、1982年パリのMaisonneuve et Larose書店から発行された同女史の学位論文で、'Poétique de l'itinéraire dans la littérature du Japon ancien'と副題される。内容は、日本文学史上の様々な作品から女史が「道行文」と判断された部分を抄出して、そこから日本人の伝統的な心情や宗教観・信仰心を理解しようとするもので、ここには「道行文」研究の重要な提言が含まれている。しかしながら、本書が広く日本人研究者に読まれた形跡はあまりなく、むしろこうした研究書が国外で出版されている事実をも知られていないのが現状のようでもあるので、既に出版から十年余りが経過してはいるが、改めて紹介しておきたい。

○

通常「道行文」という語から連想するのは、浄瑠璃や歌舞伎の“心中物”であろう。この言葉のもつイメージは、浄瑠璃の道行きを通してかなり強烈に心中と結び付くが、もともと「道行」という語は、道を行く過程を表現する名称として古くから用いられてきた。この名称としての「道行」は、文学に限らず、演劇・音楽・民俗行事などの多くの分野で使われている。しかも、それぞれの分野や時代によっても使われかたが異なり、語史としてその変遷をたどることは容易ではない。<sup>2</sup> 本書の表題に使用されている「道行文」という用語は、日本文学における道行文研究のための学術用語として、近年使用されるようになったが、その扱い方は研究者によって異なり、かならずしも概念が明確にされているわけではない。例えば、「道行」・「道行文」・「道行文体」などの用語を、内容を示す術語として理解する立場や、あるいは文体として理解する立場など、その規定も一定していない。このことは、道行文研究が国文学以外に民俗学や演劇学といった複数の領域の研究者によってなされ、それぞれの領域の研究目的や研究方法の相違から、「道行文」の捉え方が多岐に渉って存在することに起因する。したがって、道行文研究の当面の問題は、「道行文」とは何か、何をもって「道行文」とするか、という最も基本的な問題なのである。

こうした研究の現状からも知られるように、道行文の研究は歴史が浅く、大正末年頃から通史的な視点による論文がいくつつか現れ、昭和初期になって、その定義についての見解が志田延義氏によってまとめられている（「道行文の展開」＝

『月刊日本文学』昭和7年、8月・10月号）。氏の見解は、『日本文学大辞典』（新潮社）においてさらに氏自身によって整理補足されている。その後、角田一郎氏も「道行文研究序論(1)」（『広島女子大学紀要』1、昭和41年）において同様の試みをされ、『日本古典文学大辞典』（岩波書店）「道行」の項目執筆者にもなっておられる。しかしながら、この両論にしても一種の試論の段階にあり、議論の余地は多く残されているように思われる。

上代の歌謡・和歌・日記文学・軍記物語・紀行文・謡曲・狂言あるいは浄瑠璃などから道行文だけを抄出し、その定義を導き出そうとするのは、極めて困難な作業と言わなければならない。

○

さて、こうした現状から考えると、ビジョー女史が独自の道行文の定義を示さず、専ら志田説を中心に構成した事情も理解できる。つまり「地名列挙のあること、進行性の表現であること、韻文であること」<sup>3</sup> また「掛詞と古歌引用という修辞法が用いられていること」<sup>4</sup>、さらに佐々木八郎氏の論文<sup>5</sup>によって、哀愁'*mélancolie du voyage*'の雰囲気をもつものを道行文とするのである。そしてその一方で、資料の対象を謡曲と浄瑠璃以外の作品に求める。それは、道行文が上代の歌謡にはじまり、長歌・短歌に引き継がれ、平安時代になってその技巧がほぼ確立した、と考えることから、『万葉集』や平安時代の和歌を検証することで道行文の発祥や後の展開の基盤を見出そうとするのである。

ビジョー女史の道行文の基本的な理解

は、以上のように要約することができよう。道行文の定義に定説のない現在、既存の所説に依拠したとはいえ、その資料の範囲を限定していることに留意すべきであろう。もちろんその当否については今後の問題として残るが、一つの可能性として理解されよう。女史が道行文の研究に着目したのは、御伽草子に道行文があらわれることからであった。そして、御伽草子以外の「日本文学のいくつかのジャンルにも存することに気がつき、道行文は日本古典文学の一つの鍵ではないかと考え」<sup>1)</sup> 断るにいたったのだという。日本の研究では、一つの文学作品を対象とした作品論の一部として道行文を論ずることが多く、道行文それ自体を研究の主題に据え、これを体系的・網羅的に考察することは希であった。本書のように、膨大な文献を駆使して、道行文を一冊の本にまとめ上げたのは、日本の文学研究史上初めての試みである。しかも、道行文の研究文献については細大洩らさず目を通しておられ、道行文研究の現状もよく把握されている。したがって、その論点は文学研究だけではなく、宗教・倫理・歴史などの多方面にわたり、日本人の心のありかたを道行文に即して明らかにしようとする観点をもつのである。

ビジョー女史は、本書の冒頭に、外国人宣教師がローマ字で記した『天草本平家物語』を例にあげ、道行文の大衆性を指摘される。『天草本平家物語』は、室町時代の口語文で書かれたものではあるが、ただ一個所、「重衡東下り」の道行だけは、原文の文語体のまま載せていて、物語中随一の聞かせ所として、琵琶法師によって語られた。聴衆は、文字の読め

ない人々に至るまで、ひろくこの部分を愛好した。女史は、このような娯楽性を道行文の中に認めつつも、そこに日本人の内面的な宗教性をも看取しようとする。それはまた本書の最終章「Buddism et Michiyuki-Bun」で、仏教の信仰習俗に焦点を当てて論じることからも窺える。女史の視点は、あくまでも道行文を日本人の精神世界の反映と理解する。それは、道行文が、記紀歌謡の時代に始まり、江戸から近代に至るまで、様々な分野で発展し、貴族から庶民に至るまで、幅広い享受者を持ったからである。

本書には、もちろん疑問とすべき論点や問題点も含まれている。しかし、以上のような壮大な観点は、国文学研究や民俗学研究あるいは宗教学研究に重要な示唆を与えるものといえ、道行文研究の一つの可能性を示したものとして意義深いといえる。

<注>

- (1) 『奈良絵本集—パリ本—』小杉恵子・J. ビジョー共編（古典文庫）1995年。室町時代物語から異郷遍歴を描いたものを七篇翻刻する。
- (2) 角田一郎「道行文研究序論（2）」（『広島女子大学紀要5』昭和45）に「道行」の用語史がまとめられている。
- (3) 「お伽草子における道行文」（J. ビジョー『文学』岩波書店昭和50）
- (4) 注(3)に同じ。
- (5) 「道行文雑考」（『国漢』昭和7=『語り物の系譜』昭和52・笠間書院）

新刊紹介

I.アン、P.-E.ヴィル編『数理、天文、植物、身体 — 東アジア科学技術史論集』

Nombres, astres, plantes et viscères: Sept essais sur l'histoire des sciences et des techniques en Asie orientale, Textes préparés pour la publication par Isabelle ANG et Pierre-Étienne WILL, Mémoires de l'Institut des Hautes Études Chinoises, vol. XXXV, Collège de France, Paris 1994, xiii-238pp., bibliog., index.

パリ大学の中国学高等研究所叢書の第35巻として出版されたこの論集は、本通信19号にマセ・美枝子氏が紹介された、フランス国立学術研究センターの東アジア科学技術史研究班(Groupe de Recherche "histoire des sciences et des techniques en Chine, en Corée et au Japon", GDR 798 du CNRS)による研究成果のひとつである。論集の中に特に明記されていないが、論文寄稿者のお名前から、マセ氏の紹介文に記された、研究班の創設者ジャック・ジェルネ氏のコレージュ・ド・フランス退官を記念する論集であることがわかる。

巻頭には編者の一人であるピエール＝エティエンヌ・ヴィル氏(現在、コレージュ・ド・フランス中国近代史講座教授であり、研究班の代表責任者)の序文がある。それによれば、この研究班が目標とするところは、中国およびその文化圏における科学的な思考について、その背景にある精神、その方法、その独創性を明らかにすることにある。それはかつての中国科学技術史の研究が、もっぱら発明発見の目録作りに追われていたり、あるいは東洋と西洋のいずれが先かを争うものでしかなかったことへの反省から来るものであって、この遠大な目標へ向けて、研究班の総合的なプロジェクトが推進されているという。したがって、この論集はフランスの東洋科学研究の将来の方向を示す最新の成果と言うことができるであろう。

収録論文は以下のとおりである。

カリーヌ・シェムラ「数と演算と関数方程式 — 異文化圏における解法の比較研究」

Karine CHENLA, "Nombres, opérations et équations en divers fonctionnements. Quelques méthodes de comparaison entre des procédures élaborées dans trois mondes différents", pp.1-36.

(ともにゼロの概念を持たなかった古代バビロニアと中国の記数法と方程式の解法、および中世アラブ世界の数学書と中国の漢代以降の数学書に見られる平方根の開平と立法根の開立の計算等についての比較を通じて、同じ問題へのアプローチの仕方における、異なる文化の伝統から導かれた本質的な差異が論じられている。)

マルク・カリノウスキー「敦煌写本に見る数占」  
Marc KALINOWSKI, "La divination par les nombres dans les manuscrits de Dunhuang", pp.37-88.

(周代の著筮にさかのぼるとされる数による占(数卜法)について、敦煌写本の中に断片的に伝えられた五兆卜法、十二錢卜法、靈蓍卜法、周公卜法、管公明卜法、孔子馬頭卜法、摩醯首羅卜法、周公孔子占法などの実体が明らかにされ、相互の関連性が論じられている。)

ジョエル・ブルニエ「中国における巨大な数の記法とその効率的な計算方法 — 沈括の『夢溪筆談』に見られる碁盤の例をもとに」

Joël BRENIER, "Notation et optimisation du calcul des grands nombres en Chine. Le cas de l'échiquier de go dans le Mengqi bitan de Shen Gua (1086)", pp.89-111.

(漢字による巨大数表記の体系を論じ、その計算の仕方について、宋代の『夢溪筆談』巻十八(第三百四条)に示された碁の手数を求める方法を例として取り上げている。そして、きわめて実利的な傾向の強い中国科学の伝統の中であって、このような途方もない数の概念とその計算方法を考究したことの意義に言及している。)

アニック・堀内「江戸時代初期の知識人らによる中国科学の受容 — 貝原益軒を中心として」  
Annick HORIUCHI, "Les savants japonais du XVII<sup>e</sup> siècle face à l'héritage scientifique chinois. Le cas de Kaibara Ekiken", pp.113-133.

(萬曆二十四年(1596)に出版された『本草綱目』は数年後には日本にもたらされ、寛永四年(1627)以後版を重ねた。その開板にもたずさわった貝原益軒の『大和本草』を通じて、とりわけ十七世紀に盛んに導入された中国の諸科学の中で、薬局方としての本草学が日本においてどのような新しい展開を示したかが論じられている。)

美枝子・マセ「十六世紀から十八世紀の日本の医学における西洋解剖学と臨床経験」  
Mieko MACÉ, "L'anatomie occidentale et l'expérience clinique dans la médecine japonaise du XVI<sup>e</sup> au XVIII<sup>e</sup> siècle", pp.135-175.

(十八世紀における『解体新書』の翻訳は、近代医学の出発点と見なされるが、一方で、臨床を重んじる東洋医学の発展のひとつの到達点でもあった。それは中国科学における経験の重視と体系的把握の精神にもとづくものであって、『解体新書』の序を始めとする杉田玄白の文章の中には、十六世紀の曲直瀬道三らの医学思想以来の伝統が踏まえられていることが論じられている。)

コレット・ディエニ「天体望遠鏡の中国伝来」  
Colette DIÉNY, "L'introduction du télescope en Chine", pp.177-191.

(天体観測用の屈折望遠鏡は明朝最末期にイエズス会の宣教師によって中国にもたらされ、彼らの手で天文学書が作られ、多くの観測実績があげられたが、それによってもたらされる新たな世界観への抵抗や拒絶も少なくはなく、ここからその時代の中国人の科学に対する思考のありようが論じられている。)

カトリーヌ・ジャミ「康熙帝と西洋科学の普及」  
Catherine JAMI, "L'empereur Kangxi (1662-1722) et la diffusion des sciences occidentales en Chine", pp.193-209.

(清朝という非漢人王朝の基礎を固めた康熙帝は、特にイエズス会の宣教師がもたらす西洋の自然科学を積極的に導入し、とりわけ帝が愛好した数学や暦学に対しては国家的な保護を与えたが、一部の宣教師にとって自然科学は布教の手段でしかなく、帝にとっても一面においては支配のための道具でしかなかった点に、その限界があることが論じられている。)

前記のマセ氏の紹介文にもあるとおり、東アジア科学技術史研究班の活動のひとつに『夢溪筆談』を始めとする宋代の「筆記」の翻訳および研究があつて、ブルニエ氏やディエニ氏の論考にはそれが反映している。この共同研究の成果の一部は既に『科学史雑誌』42号に「沈括と諸々の科学」と題して発表された(Joël BRENIER, Colette DIÉNY, Jean-Claude MARTZLOFF et Wladyslaw DE WIE-CLAWIK, "Shen Gua (1031-1095) et les sciences", *Revue d'histoire des sciences*, XLII/4, Paris 1989, pp.333-351.)。

また、この論集に先立つ中国学高等研究所叢書の第34巻『中国の中のヨーロッパ』は、ライデン大学の教授であったエーリック・ツウルヒャー氏を始めとするヨーロッパ各国の研究者らとジェルネ氏との協力によって実現した学会議の報告集であり、研究班のメンバーであるC.ジャミ氏による清朝初期の数学におけるヨーロッパの影響についての論考や J.-C.マルツロフ氏による中国の天文学書に見られる時間と空間の認識に関する論考などが掲載されている (Catherine JAMI, "L'histoire des mathématiques vue par les lettrés chinois (XVII<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> siècles): tradition chinoise et contribution européenne", pp.147-167; Jean-Claude MARTZLOFF, "Espace et temps dans les textes chinois d'astronomie et de technique mathématique astronomique aux

XVII<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> siècles”, pp.217-230. dans L'Europe en Chine: Interactions scientifiques, religieuses et culturelles aux XVII<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> siècles, Actes du Colloque de la Fondation Hugot (14-17 octobre 1991), revus et établis par Catherine JAMI et Hubert DELAHAYE, Mémoires de l'Institut des Hautes Études Chinoises, vol. XXXIV, Collège de France. Paris 1993, xiii-255pp.).

さらに、この論集に続く同叢書の第36巻として、研究班のメンバーであるV.アレトン、A.ヴォルコフ両氏の編になる『中国における変革の概念と認識』(第九回中国研究欧州会議論文集)が出版された。「変化」の意味するものをめぐって、時代においては周易の昔から現代中国に至り、分野においては思想史、社会学、人類学、文学、幾何学、医学から女性論に及ぶ、興味深い論考が収録されている (Notions et perceptions du changement en Chine, Textes présentés au IX<sup>e</sup> Congrès de l'Association Européenne d'Études Chinoises, préparés pour la publication par Viviane ALLETON et Alexei VOLKOV, Mémoires de l'Institut des Hautes Études Chinoises, vol. XXXVI, Collège de France, Paris 1994, xxvi-267pp., index.).

このように旺盛に研究成果を発表しつつある研究班の活動に顕著にうかがえるのは、自然科学に対する人文科学的視座からのアプローチであり、あるいは文化史的・社会的な背景を踏まえた科学技術史の構築であって、これはヨーロッパにおいてはJ.ニーダム以後の中国科学史研究の趨勢であろうが、とりわけここでの具体的な作業として、多くの原典史料が共同で解説されており、いかにもフランス東洋学の面目躍如とした、きわめて実証的な手続きが取られていることが注目される。このような問題意識や方法は、日本でも既に京都大学人文科学研究所の中国科学史研究班を始めとする諸先学の歴大な蓄積があり、そのいくつかはこの論集の中に消化されているが、なお一層の交流が望まれるところであろう。

付記(1) 坂出祥伸氏の御教示によれば、京都大学人文科学研究所の共同作業による原典史料の会読方式が、フランスにおいても評価され、上記の研究班が既にこれを採用しており、イギリスのニーダム研究所も最近この方式を取り入れることにしたそうである。坂出先生の御教示に対して心から感謝申し上げます(坂出祥伸著『東西シノロジー事情』東方書店刊 1994, pp.173-175, 220-222 には、京都大学とCNRSの東西双方の科学史研究班の活動について詳しい解説がなされている)。

なお、これに関連して、今年の五月にボストン大学のリヴィア・コーン氏が、北周の甄鸞撰『笑道論』の詳細な英訳注および研究を出版されたが、その序文によれば、京都大学留学中に人文科学研究所の「六朝隋唐時代の道仏論争」研究班による同書の会読に参加されたことが、英訳注作成の端緒となったそうである。『東方学報』(京都)第60冊(1988, pp.481-680)に掲載された同研究班の「『笑道論』訳注」を基礎として、欧米における道教研究の成果をふんだんに取り入れた集大成的な業績であることを追記したい(Livia KOHN, Laughing at the Tao, Debates among Buddhists and Taoists in Medieval China, Princeton University Press, Princeton 1995, xiii-281pp., glossary, bibliog., index.).

付記(2) 一昨年前に京都で開催された第七回国際東アジア科学史会議の論文集が、このほど関西大学出版局から刊行された。CNRS東アジア科学技術史研究班の P.-E.ヴィル、C.ジャミ、K.シェムラ、F.オブランジェ、マセ・美枝子、A.ヴォルコフ、C.ディエニ各氏による報告も掲載されている(HASHIMOTO Keizô, Catherine JAMI, and Lowell SKAR(eds.), East Asian Science: Tradition and Beyond, Papers from the Seventh International Conference on the History of Science in East Asia (Kyoto, 2-7 August 1993), Kansai University Press, Osaka 1995, xii-568pp., index.).

(菊地章太)

## 新刊紹介

### 大修館書店 月刊『しにか』 特集「欧米の東洋学」

田中文雄

本来この項目は、日本で発行されたフランスや東洋学に関わる新刊書を紹介するコーナーであり、現在掲載中の月刊誌の特集を紹介するのは、あるいは不適當かもしれない。しかし、この特集の内容の大部分は、フランスの東洋学者や、フランス東洋学と何らかの関係を持つヨーロッパ人とアメリカ人学者の紹介であり、非常に興味深いものがある。著書や研究論文からでは知りえない情報もあり、欧米の東洋学の概要を知る上で大変便利な特集である。

大修館書店では、1994年3月号から1996年3月号まで二年間、この特集の連載を予定しているそうである。同社は、以前にも日本の東洋学者の生涯と業績を特集し、その後単行本として編集して、『東洋学の系譜』第1集・第2集(江上波夫編)と題して発行している。今回の特集もいずれは一冊の本に纏められると思うが、1995年11月号までのタイトルと執筆者を以下に紹介したい(人名等の表記は各執筆者の記事に従った)。

#### <座談会> 欧米の東洋学

梅村坦/斯波義信/高田時雄/森安孝夫  
(1994年3月号)

- ① アベル・レミュザ 1788-1832  
高田時雄 (1994年4月号)
- ② エドゥワール＝シャヴアンヌ 1865-1918  
池田 温 (1994年5月号)
- ③ ポール・ペリオ 1878-1945  
森安孝夫 (1994年6月号)
- ④ マルク・オーレル・スタイン 1862-1943  
梅村 坦 (1994年7月号)
- ⑤ アンリ・マスペロ 1883-1945  
福井文雅 (1994年8月号)
- ⑥ ロバート・モリソン 1782-1834  
矢沢利彦 (1994年9月号)
- ⑦ アレクセーエフ 1881-1951  
加藤九祚 (1994年10月号)
- ⑧ エチエンヌ・バラージュ 1905-1963  
斯波義信 (1994年11月号)
- ⑨ アンリ・コルディエ 1849-1925  
磯波 護 (1994年12月号)

- ⑩ ル・コック 1860-1930  
中野照男 (1995年2月号)
- ⑪ ポール・ドミエヴィル 1894-1979  
興膳 宏 (1995年3月号)
- ⑫ ベルンハルド・カールグレン 1889-1978  
大島正二 (1995年4月号)
- ⑬ ジョセフ・ニーダム 1900-1995  
橋本敬造 (1995年5月号)
- ⑭ マルセル・グラネ 1884-1940  
桐本東太 (1995年6月号)
- ⑮ プレットシュナイダー 1833-1901  
本田実信 (1995年7月号)
- ⑯ ウィットフォージェル 1896-1988  
湯浅起男 (1995年8月号)
- ⑰ ヴォルフラム・エーバーハルト 1909-1989  
大林太良 (1995年9月号)
- ⑱ バルトリド 1869-1930  
小松久男 (1995年10月号)
- ⑳ ジュゼッペ・トゥッチ 1894-1984  
立川武蔵 (1995年11月号)

15・16世紀の大航海時代の東洋への進出、経済活動とキリスト教の宣教のための東方世界への興味は、やがて近代科学としての東洋学の成立につながってくる。その後の欧米国家の東洋における勢力拡大は、研究の分野と範囲を広げた。欧米の東洋観、各国の東洋学の特徴、中央アジアにおける新発見や、新しい東洋学の方向について知るのに、この特集で扱われる19世紀初頭から最近までの東洋学者の軌跡は、見落とすことができないものである。また、この時期、特に後半の百年は、激動の時代であった。戦乱や国家体制の変化などにより、研究者個人の運命も変遷をたどった。

著書や論文からだけでは、それを書いた研究者の学説はわかったとしても、それを書くにいたったプロセス、時代背景や国情、研究に対するスタンスなどを十分に読みとることは難しい。生い立ち、師弟関係、出身校や留学地などをあわせて知ってこそ、何故その東洋学者がそのサブジェクトを選び、その方法論を採ったのかを窺知することができる。つまり、その人と学問の全体像が見えてくるし、それら個人の集大成である各国の伝統を知ることができる。また、欧米各国と、各時代の東洋学者の功績を概観することは、単に研究史の問題であるばかりでなく、今後の東洋学の進む方向を知る指針にもなりえよう。



## 日仏コロック

東南アジア部会中止

今秋開催される予定だった日仏コロック東南アジア部会は、主催者側の都合で急遽中止された。また、コロック開会の全体レセプションが、9月5日に関連学会の代表者を集めて恵比寿の日仏会館で開催された。本学会からは、中谷英明評議員が会長の代理として出席した。

## 総会開催

本学会の総会が、去る3月27日、京都市内の京大会館で開催され、会務報告・94年度決算・95年度予算が承認された。

総会終了後、高田時雄氏（京大人文研）の講演が行なわれ、京都在住のフランス人研究者など聴講者多数。ひきつづき、懇親会に移り、恒例となった参加者全員の自己紹介など飲を尽くして散会。なお、高田氏の講演要旨は本巻頭に掲載の論文がそれである。

## 訃報

† 宮崎市定（京都大学名誉教授）

94歳

† 里道徳雄（東洋大学文学部教授）

58歳

宮崎先生の追悼文は、福井会長にお書き頂き巻頭に掲載した。ここでは、里道教授の業績を紹介して追悼文にかえたい。

里道教授は、中国仏教史を専門とし、特に禅宗史に通じておられたが、近年は朝鮮仏教にも興味を持たれ、『臨濟録』に関する著書の他に朝鮮仏教の八関斎を解明した論文など多数にのぼる著述がある。本学会との関連で言えば、敦煌・中央アジアの仏教研究を通じてフランス東洋学と係わっておられた。

佐渡の医家に出身し、はじめ医学部に進み後に道を変えて花園大学に学び、東洋大学大学院に転じた。以後、助手・講師と進んで90年に教授。ご冥福をお祈りする。

## 「ようこそ」「天平」 の2会発足

—F. F.—

表記の2会が新たに発足した。その会長であり日仏会館の役員でもある飯山敏道東京大学名誉教授は、昨年12月に下記のような発足挨拶状を関係者に送られた —

【フランス科学研究庁 (Centre National de la Recherche Scientifique, 略称 C.N.R.S.) は日仏両国間の研究協力、研究者交換体制を強化するため1990年にはフランス科学研究庁日本支部 (C.N.R.S. Japon) を創設、常駐教授1、補佐研究員若干名、秘書若干名からなる事務局を東京に設置しました。

現在この事務局は

フランス科学研究庁 (C.N.R.S. Japon)  
〒160 東京都新宿区若葉1-14 (Tel: 03-3354-5501) にあります。

更にC.N.R.S.は1994年4月以降、東京大学生産技術研究所との協定に基づき、同研究所内に超小型ロボットの研究を行うC.N.R.S.の分室を設置し、同研究所所員との共同研究を始めております。

これらの諸組織の設置と共に、長期（半年以上）にわたる在日仏人研究者〔理、(工、農の諸分野を含む)、医学博士号既得者〕の数は20名を越え、更に、学生、研究生の数もほぼ同程度に達しております。また、企業研究所に来日している仏人研究者も増加しております。

これと対応して、日本からフランスに赴きC.N.R.S.傘下の研究機関 (C.N.R.S.の研究所、各地の大学など) に赴き研究を行っている長期滞仏の邦人研究者の数も、以前にもまして増加の度を高めております。

この様な彼我の人物交流の活性化に鑑み、フランスに於いては—在日経験のある仏人研究者による来仏邦人研究者をフランス事情、滞仏生活、研究情報等の面で援助した親睦

を深める事に依って、フランスの文化、フランス研究者気質の理解を図る会「ようこそ」を、また、

日本に於いては—在仏経験のある邦人研究者による来日仏人研究者を日本事情、滞仏生活、研究情報等の面で援助した親睦を深める事に依って、日本文化、邦人研究者気質の理解を図る会「天平 (仮称)」を、C.N.R.S.の外郭協会として発足させ、このほどフランス政府の公認協会として登録されました。

科学研究はその成果と共に、国々の文化、世界の文化の一環をなすものであります。

“科学には国境はないが、祖国にはある”といわれる所以でもあります。国際協力により、互いに理解を深め、新しい観点にたった研究を創造して行くことに、大きな意義があると考えます。

何卒この点をご理解頂き、今後の御支援を賜りたく、御挨拶申し上げます。

平成6年12月 “天平” (仮称) 協会  
幹事一同  
会長 飯山 敏道  
東京大学名誉教授】

「滞仏科学研究従事経験者登録」が募られ、この申込み先は、〒160 東京都新宿区若葉1-14、フランス科学研究庁日本支部気付「天平」秘書係 (西村宛) TEL: 03-3354-5501/2 FAX 3354-5503 であった。

この結果、本年の12月9日 (土) 夕刻、東京日仏学院で「第一回天平総会」が開かれることになり、下記のような通知状が発送された —

【在仏経験のある日本人研究者による来日フランス人研究者の援助の会・天平につきましてお伺い致しました所、早速お返事を下さりありがとうございます。おかげさまで今日までに240人の方から御返事を頂き全国規模の連絡網が出来つつあります。(後略)】

## 第2回アジア学術会議開催される

平成7年3月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、新規に学術研究総合調査費などを計上した平成7年度予算及び2月に開催された第2回アジア学術会議の概要についてお知らせします。

### 平成7年度日本学術会議予算

平成7年度政府予算(案)は、平成6年12月25日に閣議決定されましたが、日本学術会議関係の予算決定額は、11億2,339万4千円でした。その概要については次のとおりです。

#### 【主な経費の概要】

##### (1) 学術研究総合調査

15百万円(平成7年度新規)

科学研究者の研究環境の改善と研究意欲の向上に関して、国内において意識調査及び実情調査を行う

とともに、外国においても実情調査を行い、結果を整理・分析し、日本学術会議において問題解決のための有効な方策について提言するもの。

##### (2) アジア学術会議の開催

22百万円(昨年度同額)

アジア学術会議は、アジア地域の各国を代表する科学者が一堂に会し、アジア地域において学術の果たす役割、学術交流の在り方等について討議することにより、相互理解を深め信頼関係を築くとともに、アジア地域ひいては世界の学術の発展に資するためを実施するもの。

平成7年度日本学術会議関係予算決定額表

(単位：千円)

事 項	予算決定額	備 考
日本学術会議の運営に必要な経費	1,123,394	対前年度比 93.5%
1 審 議 関 係 費	292,820	重要課題の特別検討、移転準備委員会、I G B Pシンポジウム、公開講演会、学術研究総合調査(新規)等
2 国際学術交流関係費	208,750	
(1) 国際分担金	69,505	
(2) 国際会議国内開催	66,211	7年度開催(神経生理学、健康教育、ロボット、憲法、真空物理学、獣医学の6会議)
(3) 代表派遣	44,006	8年度開催(理論・応用力学、国際関係、熱帯医学、地域学会、化学熱力学、畜産学の6会議)
(4) 二国間交流	6,823	
(5) アジア学術会議の開催	22,205	
3 会員推薦関係費	20,000	
4 その他の事務費等	601,824	一般事務処理費等

### 第2回アジア学術会議～科学者フォーラム～の概要について

日本学術会議は、アジア地域の各国科学者の代表を東京に招き、本年2月6日(月)から9日(木)までの4日間、三田共用会議所(東京都港区)において第2回アジア学術会議～科学者フォーラム～を開催しました。

会議には、中国、インド、インドネシア、日本、大

韓民国、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ベトナムの10か国の学術推進機関(アカデミー等)から推薦された人文・社会科学系及び自然科学系の科学者20名が出席し(日本からは伊藤正男日本学術会議会長及び利谷信義副会長が出席)、「アジアにおける学術交流のための方策」をメインテーマとして活発な討議を行いました。

初日の6日には、タイのチュラボン王女殿下、イン

ドのメノン博士による特別講演が行われたほか、高岡総理府次長(内閣総理大臣あいさつ代読)、藤田学術院院長をはじめ、国会議員、関係学協会の方々約200名をお迎えし、開会式及び歓迎レセプションが開催されました。

翌7日からは、それぞれの国籍や専門分野を超えて、アジア地域における学術の振興という共通の目的の下、熱心な討議が行われました。

その結果は、次項議長サマリーとして取りまとめられ、9日に無事閉会しました。

開催に当たり御支援、御協力いただきました方々に厚くお礼申し上げます。

### 議長サマリー (要約・仮訳)

#### 第2回アジア学術会議～科学者フォーラム～

1995年2月6日～9日、東京

1. 第1回アジア学術会議(1993年11月、ACSC)の提案に基づき、第2回アジア学術会議が日本学術会議の主催により、アジアの10カ国から20名の科学者を集めて開催された。参加国として新たにベトナムが加わり、暖かく迎えられた。開会式において、タイ王国のチュラボン王女殿下及びインドのメノン博士による「アジアにおける学術交流のための方策」をテーマとした講演が行われた。また、村山総理大臣及び藤田学術院院長から祝辞が送られた。
2. 前回の議長サマリーの諸原則を議論の出発点とし、最近の科学の動向、21世紀に向けた世界の状況を踏まえ、アジアの科学者の継続的かつ効率的な学術交流のためのテーマを巡って総合的な検討がなされた。
3. 討議の中で、参加者は、経験に基づくユニークで示唆に富むアイデアを紹介し、幅広い観点から意見を交換した。要点は次のとおりである。
  - (1) 科学分野における協力は、人々の「生活の質」の向上だけでなく、アジア地域における「持続可能な発展」も目的としなければならない。
  - (2) 環境破壊、人口爆発等の地球的課題への取組みに際し、人文・社会学者と自然科学者が密接に協力していくことが重要である。
  - (3) アジア地域においてとりわけ重要な「持続可能な発展」を確保し、国際的な共同研究を促進するために、人材育成が重要である。このための国際協力は、平等互恵の原則の下に推進されなければならない。
  - (4) 化学、農学、医学等の特定の分野において現在行われている、また、将来行われるであろういくつかの試み(「アジア化学推進機構」、「アジア応用システム分析研究所」、「アジア伝統医学推進機構」、「自然災害の緩和のための科学協力」)が地球的課題を解決するための方策として紹介された。また、「共生」という概念に関して議論があった。

4. 参加者はACSCにおける中長期的な研究目標として「持続可能な発展」を取り上げた。このテーマは、さらなる検討を通じて、より扱いやすいサブテーマへと細分化される必要がある。また、21世紀を見据えつつ、アジアの知の伝統を生かし、人文・社会科学及び自然科学の融合を図るという、新たな観点から研究を行っていくことも将来の目標である。

5. これらの問題を議論する場として、ACSCのあり方は大きな関心を集めた。

将来の展開としてACSCを恒久的な組織にすることの可能性についても議論があった。参加者は別紙に示された基本理念、目的及び活動に概ね同意し、各自、持ち帰って関係方面とさらに議論することとなった。

6. ACSCの目標を達成するため、参加者は努力を続けることに同意し、少なくとも新組織が確立するまでの間は日本学術会議によりACSCが毎年開催されること、また、将来的には日本以外でも開催されることが望まれた。なお、日本学術会議が新組織の事務局となり、また、各国は各々の窓口となる機関を決めるべきであるとされた。

#### 新組織について

##### 1. 基本理念

- a. アジア共通の課題について審議、建議する組織
- b. アジアの知の伝統を踏まえ、人文・社会・自然科学の融合を図る組織
- c. アジア域内各国各地域に広く開かれ、他の国際学術団体とも連携を図る組織

##### 2. 目的

「持続可能な発展」と「生活の質」の向上を目指して国際学術協力を推進するため、人文・社会・自然各分野の科学者が国籍や専門を超えて意見、情報の交換を行う場となること。

##### 3. 活動

- a. 科学者に関する提案とそのフォローアップ
- b. 学術情報の収集・解析・普及
- c. アジアの学術界の連携強化
- d. 進行中の研究活動の評価・調整
- e. 総会の開催、シンポジウム・ワークショップの支援

#### 日学双書の刊行案内

日本学術会議主催公開講演会の記録をもとに編集された次の日学双書が刊行されました。

日学双書No.22「尊厳死の在り方」

〔定価〕1,000円(消費税込み、送料240円)

※問い合わせ先

財団法人日本学術協力財団(〒106 港区西麻布3-24-2 交通安全教育センタービル内 ☎03-3403-9788)

## 編集後記

○爆弾騒ぎ・核実験・フランス製品の不買運動など、この秋、国内では何かと話題をふりまいたフランスではあったが、パリ市内は相変わらず日本人観光客で溢れ、ルーブル地下街のエルメスのファッションショーには、日本の服飾関係者が大挙しておしかけ、不買運動の拡大を懸念していた関係者は胸をなで下ろしたと。

○大相撲パリ場所も不慮の失火があったものの先ずは成功。そして、日仏関係はまた何事もなかったかの様である。

○そんな中、ニッコー・ド・パリに会議参加の京都・妙法院門跡一行を福井会長と共に表敬訪問したところ、たまたまシラク大統領をロビーで見掛けた。S.P. 2～3人を引き連れただけのもので、大統領と気づいた人は他にいなかった様であった。ギョとしたわれわれに一瞥をくれて、足速に立ち去った。

○ホテル関係者の先導もなく、全くのお忍びというよりは、むしろ隠密行動に近かったように思う。折柄、興味がつゆる。

(山田利明記)

## ☆編集委員

菊池章太・田中文雄・山田利明

## 投稿規定

会員諸氏からの投稿を募ります。

できればMacintoshを用い、以下の設定で入力したフロッピー及び打ち出し原稿をお送りください。他のワープロもしくはパソコンをお使いの際は、テキストファイルに落とした上でお送りいただければ結構です。その際、文字飾り、罫線などのご使用にならないよう、また、スペースも行頭以外にはお使いにならぬよう、ご注意ください。幸いです。

用紙サイズ : A4  
上端マージン : 23  
下端マージン : 27  
左端マージン : 32  
右端マージン : 90

尚、手書き原稿は、当方で入力致します。

日佛東洋學會會員名簿

赤松 明彦  
AKAMATSU Akihiko

秋山 光和  
AKIYAMA Terukazu

アンサル、オリヴィエ  
ANSART, Olivier

蘆田 孝昭  
ASHIDA Takaaki

シャリエ、イザベル  
CHARRIER, Isabelle

竺沙 雅章  
CHIKUSA Masaaki

デアヌ、フロリン  
DELEANU Florin

デュケヌ、ロベール  
DUQUENNE, Robert

デュルト、ユベール  
DURT, Hubert

江上 波夫  
EGAMI Namio

遠藤 光暁  
ENDO Mitsuaki

フィエヴェ、ニコラ  
FIEVE, Nicolas

藤枝 晃  
FUJIEDA Akira

福井 文雅  
FUKUI Fumimasa

福島 仁  
FUKUSHIMA Hitoshi

ギメ美術館  
Guimet(Musee)

濱田 正美  
HAMADA Masami

日佛東洋學會會員名簿

羽田 正  
HANEDA Masashi

服部 正明  
HATTORI Masaaki

平井 宥慶  
HIRAI Yuhkei

平川 彰  
HIRAKAWA Akira

廣川 堯敏  
HIROKAWA Takatoshi

堀池 信夫  
HORIIKE Nobuo

市古 貞次  
ICHIKO Teiji

井狩 彌介  
IKARI Yasuke

池田 温  
IKEDA On

生田 滋  
IKUTA Shigeru

石田 秀實  
ISHIDA Hidemi

石田 憲司  
ISHIDA Kenji

石上 善應  
ISHIGAMI Zenno

石井 米雄  
ISHII Yoneo

石澤 良昭  
ISHIZAWA Yoshiaki

岩田 孝  
IWATA Takashi

彌永 信美  
IYANAGA Nobumi

日佛東洋學會會員名簿

彌永 昌吉  
IYANAGA Shokichi

門田 眞知子  
KADOTA Machiko

柿市 里子  
KAKIICHI Satoko

金谷 治  
KANAYA Osamu

神田 信夫  
KANDA Nobuo

狩野 直禎  
KANO Naosada

鹿島 有希子  
KASHIMA Yukiko

加藤 純章  
KATO Junsho

川合 康三  
KAWAI Kozo

川本 邦衛  
KAWAMOTO Kunie

川崎ミチコ  
KAWASAKI Michiko

菊地 章太  
KIKUCHI Noritaka

木津 祐子  
KIZU Yuko

小林 正美  
KOBAYASHI Masayoshi

小谷 幸雄  
KOTANI Yukio

古藤 友子  
KOTOH Tomoko

興膳 宏  
KOZEN Hiroshi



日佛東洋學會會員名簿

栗原 圭介  
KURIHARA Keisuke

楠山 春樹  
KUSUYAMA Haruki

桑山 正進  
KUWAYAMA Shoshin

京戸 慈光  
KYODO Jiko

前田 繁樹  
MAEDA Shigeki

丸山 宏  
MARUYAMA Hiroshi

増尾伸一郎  
MASUO Shin'ichiro

松原 秀一  
MATSUBARA Hideichi

御牧 克己  
MIMAKI Katsumi

三崎 良周  
MISAKI Ryoshu

宮澤 正順  
MIYAZAWA Masayori

森 由利亞  
MORI Yuria

森賀 一恵  
MORIGA Kazue

森安 孝夫  
MORIYASU Takao

明神 洋  
MYOJIN Hiroshi

中村 元  
NAKAMURA Hajime

中村 璋八  
NAKAMURA Shohachi

日佛東洋學會會員名簿

中谷 英明  
NAKATANI Hideaki

成瀬 隆純  
NARUSE Takazumi

成瀬 良徳  
NARUSE Yoshinori

小河 織衣  
OGO Orië

岡本 さえ  
OKAMOTO Sae

岡本 天晴  
OKAMOTO Tensei

丘山 新  
OKAYAMA Hajime

岡山 隆  
OKAYAMA Takashi

大久保泰甫  
OKUBO Yasuo

小名 康之  
ONA Yasuyuki

大谷 暢順  
OTANI Chojun

尾崎 正治  
OZAKI Masaharu

定方 殷  
SADAKATA Akira

齋藤 希史  
SAITO Mareshi

坂出 祥伸  
SAKADE Yoshinobu

酒井 忠夫  
SAKAI Tadao

阪本(後藤)純子  
SAKAMOTO-GOTO Junko

日佛東洋學會會員名簿

櫻井 清彦  
SAKURAI Kiyohiko

澤 美香  
SAWA Mika

白杉 悦雄  
SHIRASUGI Etsuo

白戸 わか  
SHIRATO Waka

庄垣内正弘  
SHOGAITO Masahiro

菅原 信海  
SUGAHARA Shinkai

砂山 稔  
SUNAYAMA Minoru

鈴木 董  
SUZUKI Tadashi

高橋 稔  
TAKAHASHI Minoru

高崎 直道  
TAKASAKI Jikido

高田 時雄  
TAKATA Tokio

武内 紹人  
TAKEUCHI Tuguhito

田中 文雄  
TANAKA Fumio

館野 正美  
TATENO Masami

徳永 宗雄  
TOKUNAGA Muneo

颯波 護  
TONAMI Mamoru

虎尾 達哉  
TORAO Tatsuya

日佛東洋學會會員名簿

坪井 善明  
TSUBOI Yoshiharu

都留 春雄  
TSURU Haruo

梅原 郁  
UMEHARA Kaoru

ワッセルマン、ミシェル  
WASSERMAN, Michel

渡會 顯  
WATARAI Akira

八木 徹  
YAGI Toru

山田 均  
YAMADA Hitoshi

山田 利明  
YAMADA Toshiaki

山本 澄子  
YAMAMOTO Sumiko

山本 達郎  
YAMAMOTO Tatsuro

山折 哲雄  
YAMAORI Tetsuo

矢野 道雄  
YANO Michio

吉田 敦彦  
YOSHIDA Atsuhiko

吉田 敏行  
YOSHIDA Toshiyuki

吉田 豊  
YOSHIDA Yutaka

湯川 武  
YUKAWA Takeshi

由木 義文  
YUKI Yoshifumi

日佛東洋學會會員名簿

遊佐 昇  
YUSA Noboru

湯山 明  
YUYAMA Akira

---

日仏東洋学会 **通信** 第20号

1995年12月25日

編集 日仏東洋学会

発行者 福井 文雅

〒162 東京都新宿区戸山1-26-1 早稲田大学

文学部 福井文雅研究室 TEL:03-3203-4141

Ext.2482

発行所 〒606 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部

興膳 宏研究室 TEL:075-753-2808

FAX 075-761-0692(京都大学文学部)

印刷所 六稜舎 〒530 大阪市北区浪花町9-12-402

TEL:06-371-1681

---